

養老町が生んだ

国学者

田中道磨さん



田中道磨翁顕彰会
養老町教育委員会

養老町が生んだ

国学者

田中道磨さん

田中道磨翁顕彰会
養老町教育委員会

はじめに

田中道磨翁とのご縁をいただいてまだ日の浅い私。上石津多良を出て養老町に籍を置くことになったのも、翁との繋りを貫ったこともまことに不思議な不思議な縁である。更に翁の顕彰会の一員に加えられて、養老町の生んだ国学者、翁をできるだけ詳しく知り、また多くの人々に知ってもらおう様努めることが与えられた責務と覚し種々の策を思念する日々であるが、良策もなくもどかしい思いの日々である。

先きに「歌集道全集」について記す機会を得たものの、これでは当然不十分なことであって、もっと多くの人々に親しまれ、翁の心を知ってもらうことはできないかの一念から、今まで見・聞き・調査収集した資料をもとに一誌に纏めることを試行した次第である。もとより八十を越した老人のこと、不完全なことは自認のことである。

ねがわくばこれが道磨さんと親しむ足場となり、本当の道磨研究がすすめられることを。

凡 例

- 一 本書の執筆は養老町田中道麿翁顕彰会副会長の山口一易が行った。
- 一 文中「田中道麿翁」と記すべきところを単に「翁」と表記した。
- 一 「しのぶぐさ」等よりの引用文は、原文のまゝを主眼としたが、特に長い文節については、読みの便を図るために中切りを入れた。また後に小さく、漢字・かな遣い・送りかなを通用式に改め、引用文の私訳を記した。
- 一 万葉の歌についてはできる限り集中の所属番号、万葉仮名表記を記した。
- 一 遺墨については平成十七年十二月催された養老町での田中道麿展時の目録に依り原文のまゝを記し、できる限り傍に現代通用文字、読みを記した。
- 一 歌は「道全歌集」より抜粋し、歌の下に数字、年令は歌集中の整理番号・制作時の年令を示す。
- 一 顕彰碑文について読み易くするために中切りを入れた。

目次

1.	出生	8
2.	在郷時代	10
3.	良師を求めて	14
4.	遍歴時代	18
5.	名古屋に国学の塾を開く	21
6.	本居宣長との対面そして入門	24
7.	主な研究編著	29
8.	学問一途真摯な追求姿勢	33
9.	作品 書と歌	42
10.	死去と奥津城	62
11.	翁住舎趾碑	66

忍草おろ
わが屋に

朝日さし
めでたき

春を
むかえつる
かも



公羽の「立春」のうたより
しのぶの生える草屋根の
生家を描いて



田中道磨翁略伝

享保九年（1724）美濃国多芸郡榛木村はりのき（現在 岐阜県養老郡養老町飯木）に生まれる。幼名 茂七、九才頃

より歌をつくり始める。学問好きで大垣俵町の平流軒という本屋に奉公。

宝暦元年（1751）二十八才頃より歌を詠むことも本を読むことも止めて、屋根葺きの手伝いや土木工事に従

事。三十才頃には薩摩義士による宝暦治水工事が行われたので土工として地元の若者らと

参加。が勉学への志は捨て切れず仕事を捨て東海道土山駅の駕籠かきとなり、会う人々を

頼みによい先生を見つけることにつとめる。

宝暦七年（1757）三十四才 彦根おおすがなかつの大菅中ぶちゆき養父千之にめぐり合う。又彦根の豪商納屋なや七右衛門の心篤い援

助を受け、学問一途に専念する。

宝暦九年（1759）この頃尾張国名古屋に住む。一時大阪にも。商家の使用人として苦勞する。国学の講座を

開いてもうまくいかない。

安永元年（1772）四十九才 名古屋小桜町靈岳院の傍の桜天神の社僧となり国学研究の塾を開く。次第に講

筵に連る人がふえ一時は三百人を越えるほど。

安永六年（1777） 五十四才 松阪で本居宣長と対面。帰郷後万葉集についての質疑を開始する。

安永九年（1780） 五十七才 再度松阪を訪問、宣長の鈴屋門に入門。

天明元年（1781） 道麿社中で賀茂真淵十三回忌霊祭を行う。

天明三年（1783） 六十才 二月六十の賀。この頃剃髪して名を「道全」と改める。

天明四年（1784） 六十一才 十月四日 名古屋長者町常瑞寺にて死去。

1. 出生

享保九年（1724）美濃国多芸郡^{はりのき}榑木村（現在の岐阜県養老郡養老町飯木）の農家に生まれる。多芸郡の名は古く、「古事記」の倭武尊の条に、また「万葉集」に天平十二年（740）聖武天皇巡幸の時の大伴宿弥家持の歌「田跡河の滝を清み古へゆ宮仕へけむ多芸の野の上に」がある。榑木村は、「新撰美濃志」に「榑樹を俗にはんの木といふ、此あたりも榑原にて有しなるべし」とあつて普通、「はんのき村」と言われていた。更に「貞治五年（1366）八月將軍義詮より土岐下野入道頼高へ賜りし証狀に美濃国多芸内春木郷とあるのはこのことなり」とも記されているから「ハルノキ」といったこともあるのであろう。後に榑を飯に変えられていったらしく道麿翁は「飯木村」と書き、自分を「飯木翁」と号している。

多芸郡は明治三十年（1897）養老郡にかわり、飯木村は岩道・西岩道・大跡・口ヶ島と合併して広幡村と呼ばれたが、昭和二十九年（1954）の町村合併で養老町に編入され、飯木は養老町飯木となっている。

出生地は飯木村居村三百九十八番地（昭和四十年（1965）の耕地整理事業により、飯木六十二番地となる）面積二畝二十四歩（八十四坪）約二百七十七平方メートル）であつたと、土地の所有者は転々と移り現在では伊藤

和幸の所有となっている。今その地に生誕地の標石が建立されている。高さ一メートルほどの自然石である。

先賢田中道磨大人発祥地

背面に 昭和十八年一月後学建之 側面
に 本居宣長五世孫清造書

当時の広幡村長だった丸毛治基が昭和十八年（1943）

一月企画したが、土地所有者等との話し合いがうまくい

かず十数年間石工の庭先に置かれていたが昭和三十二年

（1957）六月に至って話がまとまり、田中道磨顕彰会の手

によって立石された。



2. 在郷時代

道麿は俗名を庄兵衛または莊兵衛といい後に榛木翁と号し、晩年薙髪して道全といった。幼名は茂七である。この村に同じ年頃で茂七が二人いた。村人は呼び分けるのに顔色で区別し白茂七、赤茂七といったと。道麿は白茂七の方であった。日焼けが強かったのか時には黒茂七と呼ばれたこともあったとか。

生家は代々身分の低い平凡な一介の土百姓であったようだ。屋敷も二畝二十四歩で百姓としては狭い方ではないだろうか。

やや長じて物心つきはじめた頃、大垣俵町の^①平流軒という本屋に小僧に出された。このことが翁の生涯を決定する最大の要因となったのではないだろうか。少年の頃から物事に熱し易く好学心が強く書物の虫だったように、伯父の与えた^②節用集を全部暗記してしまったそうである。

当時の農家の子どもが学問をするなどのことは異例のことであった。農家の子どもはせいぜい簡単な読み書き珠算ができれば沢山とされていた。然るに翁は少年の頃から三世相や節用集などの通俗的な教養書では満足せず近郷近在は勿論、諸方に足を運んで書物を借りて読んだり筆写したりして居られた様である。

③しのぶぐさによれば『さる家に生まれながら、翁をさなき程より、見るものきく物につけて、歌をなんよま
れけるとぞ、いともくあやしき人なりけり、はじめて歌をよまれけるは九つといふとしとか、手ならひの本の
つ、み紙に「十九本手本也けり、六三郎和俗文章手ほんなりけり」といふ事をなんかきつけられる。六三郎は其
ほとの名なりしとぞ、こはさとひ言のま、なれと、いさ、かもてにをはのたかひなくて、其心明らかにきこえ、
また二五の句におなし言葉のあなるは、いともいにしへの歌のしらへなるを、それになひたるは、後つひに万
葉集の歌を、深くしのはれぬへきことのきさしともいふへく、又言霊の神のさちとも、さちとやいふへからんと、
あやしくたふときことなりかし』と

しのぶぐさの解「農家の生まれですが幼年の頃より目にするもの耳にするものすべてに歌をつくられたとか、大へんすぐれた
力を持った人でした。初めて歌を詠まれたのは九才のときといわれている。習字の本の包み紙に、「十九本は習字の手本である。
六三郎は和俗文章の手本である。」と 六三郎は書物の名前で、これはこの地方の通俗的なことばがつかわれているが、少しも
てにをは（助詞）の間違いはなく、その心の思いがたしかに伝えられている。又二句目・五句目に也けり・なりけりと同じ言
葉を使っているのは、まことに古代の歌の詠い方であって、その使い方に叶っているのは後年万葉集の歌を深く研究される兆
ともいうべきであって、幼いころからことだが宿っていたのだとも、不思議な力・神秘的な力が備わっていたともいえる」

再びしのぶぐさによれば『をよすげゆくほど、近くも遠くも、そのわたりに歌ぶみもたる人あれば、かりても
見写しもとりなどして、ますく歌に心をよせられけるに、見と見られけるふみども、みな六七百年こなたの物

なれば、何くれとうたがはしき事どもの多かるまゝに、歌に名高き人とあるには、行とぶらひて、心得がてなるふし／＼をとれるに、こはひめごと也、そはわればかりのもの、しりきはむべき事ならずなどいひて、さだかに理りもてときさとす人あらざりしかば歌てふものこそいとも心得られね、さることまなびてなにかはせんとて、廿八というとしより歌よむこともふみ見ることも、ふつに思いとゞまられけるとなん』

しのぶぐさの解「成長するにつれ近所はともかく少し遠方でも歌の本を所有している人があれば出かけて本を借りて写し取るなどして、ます／＼歌のみに心を引かれていかれたが、みせてもらった書物はどれも古く六・七百年程の昔のもので何となくあやふやなことが多く、歌のみに名高い人を訪ねて疑問の点などを質問しても、これは教えられない秘め事だとか、かんたんにあなたが調べ尽くせることではありませんと返され、はつきりと道筋を立て、納得のいく様に教えてくれる人はありませんでした。迷い迷ったあぐ歌というのは何なのか…こんなことを勉強して何になるのだろうか…何もならないのではないかと試行錯誤の上、廿八才のときから歌をつくることも書物を読むこともすっかり止めてしまった」

貧しく無名の若者にとって口惜しいことであつたでしょう。封建社会に抵抗する様に歌をつくることも学問をすることも断念されたのでしよう。

丁度その頃はこの地方では宝暦治水工事の始まる前で、多芸輪中一帯は年々洪水に悩まされ続けていました。学問することを捨てた後は村の若者達とあちこちの土木工事や屋根葺きの手伝いに従事していたようである。

又しのぶぐさによると『その頃はあやしげなるをのこどもをひきゐて、池ほり堤つくるなどなりはひととして伊勢

近江わたりなどにも常に「行通はれる」と

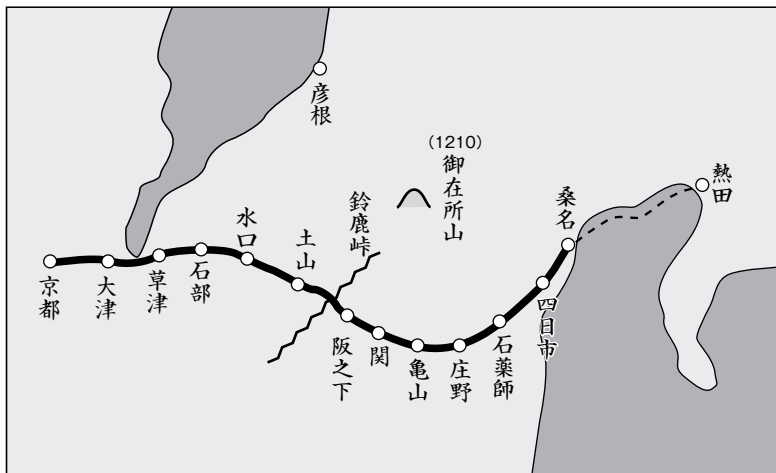
しのぶぐさの解「その頃は身分の低い若い男たちを引率して池掘りや堤防づくりなどの仕事に従事して、遠く伊勢（三重県）近江（滋賀県）などへも出かけられていた」

- ① 平流軒―大正初期まで本屋として続いていたが今はその子孫の方がアパートを経営しておられるが、道麿に関する言い伝えも遺品も何もないと（昭和四十七年（1972）中村準一氏談）
- ② 節用集―国語辞典。文明年間（1469）86）ごろ成立。室町時代の用字・用語を示し語釈・語源を記している。明治初期まで広く利用された言語学上の好資料。（昭和四十一年五月二十日初版発行小学館原色百科事典より）
- ③ しのぶぐさ―田中道麿の弟子であった加藤磯足が文化三年（1806）、道麿の二十三回忌にあたり旧師の経歴や逸話を記したもので道麿伝には信憑すべき資料とされている。

3. 良師を求めて

一旦捨てた筈だったが生来の向学の志は再び燃えあがり、良き先生を探すために東海道土山宿の轎夫^{かこき}となり、駕籠^{かこ}を使う旅人から情報を得ようとつとめた。やっとある日彦根に④大菅中養父先生^{おおすがなかやぶ}が居られることを知り、早速彦根に移り、中養父先生の弟子となることを許され、念願の学問の道への出発をしたのである。それに翁の勉強への思いの篤いことを知った彦根の豪商・納屋七右衛門という奇特な人が自分の家に住ませ、衣食のことなどすべて面倒をみて下さることになり、その上必要な書物は全部買い揃えて下さった。何と有難いことだったのでしょうか。かうして三年間何の心配もなくめざす学問に打込むことができました。

彦根は有力な城下町で文化一般が進んで居り、学者や詩人なども



たくさん居られた。従って諸国の名士の往来も頻繁であった。翁はこの地において良師益友と出会うことを期待されていたのでしょうか。

このことをしのぶぐさは『三十四といふとしに、あふみの国の彦根に行つて、なにとかやいふ寺に日頃やとり居てかのなりはひのことをもしていますかりけるに、ある日あるしの僧のいへらくは、此となりなる大菅のなにかしといふ人こそ、歌の道にならひなき博士にはあれといふことを、ものゝつてにかたりけるを、翁かたはらにきをりて、はやくのとし頃うたかはしう思れたりける歌ふみのをち／＼をものにかきつけて、大菅氏に此りとさとし給ひねと…中略 此五とせ六とせ歌学ひうちすてつる事などもかたりて、いまより又歌の道に入たち侍りせんとてをしへ子になし給へと深くちきりて、それよりの堤つくわさをもやめて、もはらそしをしへをうけん料にやかてかの彦根に住なんとて、井伊の殿に仕ふるなにかしの家の仕へ人になりて、いとま／＼のひまに夜昼となく、大菅氏のもとにかよひて万葉集・古今集などをひたふるに学はれけるとなん』

しのぶぐさの解 「三十四才の年に近江の国の彦根に行き、あるお寺に宿をかりてなんとか日ぐらしをしていたが、或る日和尚さんが「隣り村の大菅という人は歌の道を勉強され並ぶ人もないほどすぐれた人ですよ」と話されているのを耳にされ、以前に疑問に思われていた歌数首を書き、大菅さんに教えて下さる様頼んで下さいと頼みました…中略。ここ五六年間は歌の勉強をやめていましたが、又勉強したくなりましたので弟子にして下さいと誓を立て、飯末に居た頃の土木工事の仕事をやめて専ら教えを受けたいと彦根に移り、井伊の殿様の家来の上に仕えることにし、暇をみつけて夜昼となく大菅さんのもとに通つ

て万葉集・古今集などの勉強を一生懸命始められた」

又 滋賀県人物志には『田中道磨・東海道士山駅の轎夫なり、賤業に従ふと雖ども国学に志あり良師を得んと欲し常に之を思ふて轎を昇ぐ。一日一旅人を昇ぐ其人国学に通ずるもの、如し行く行く語て其学を察するに知らざる所多し。されど盛に大菅中養父の学を称す道磨以為く是浅学者のみ、従つて学ぶに足らず。然りと雖も大菅中養父あるを知り心窃に喜悦す。遂に彦根に來り之が弟子となる。道磨日々、唯書を読むのみ。納屋七右衛門は彦根の豪商なり任侠之を聞き彼を己が家に置き為に多くの書を購ふて之を讀ましむ。居ること三年学成りて郷に歸る。後略』

人物志の解「田中道磨は東海道の土山駅で旅人を受けて運ぶ駕籠かきとなつていたが国学研究の思いは強く、なんとかして良師を早く見つけたいとねがつていた。或る日国学を勉強しているらしい一人の旅人に出合い、かごをかつぎながら話をしていたが余り多く勉強しているようではなかったが、大菅中養父をしきりほめたたえていた。このお客は自分の先生とするほどでないことがつかりしたが大菅先生を知ることができ大よろこび。早速彦根に行き弟子になった。それから毎日勉強に励んだ。幸い納屋七右衛門という彦根の大きな商人が翁の向学心の強いことを知り、自分の家に住わせた上にたくさん書物を買ってくれた。こゝで三年間みっちり勉強したお陰で多くの学問を身につけることが出来、国学者として一人立ちできる様になり、ふるさともどるようになった。後略」

翁は彦根での充実した日々をよくを歌集道全集に、宝暦七年（1757）八月十五夜あうみの海に月を見

侍りてと題して、秋のよの今宵は鳩の海へにもみるめのしけき月の影哉」と詠んでいる。「今夜はすっきり晴れた中秋の名月です。たくさんの水鳥のすむ湖面に月光がふりそ、ぎまことに美しい限りです」と念願叶ったよろこびを歌にあらわしています。

④大菅中養父―彦根井伊候の藩士で皇国の古言語・詠歌に長じ翁より十四才年長、中養父は当時の国学の第一人者と称せられた賀茂真淵の門人だった。翁が真淵に直接師事したかどうかははっきりしないが、真淵の門人であった中養父・其の他の人々を通じて間接的に真淵の学風に薫染するところは少なくなかったと思われる。又この頃彦根の郊外の覚勝寺に海量という僧侶が居、詩文に長じ和歌もよくされていた。この海量は大菅中養父と親交があり、自然と翁も歌を通じて親しくして居られたといわれている。

4. 遍歴時代

彦根で刻苦勉強ようやく一本立ちの国学者たるの自信を固めた翁は、恵まれた彦根を去って世の荒波に漕ぎ出していった。はじめは大阪のようだ。国学者としてはじめて門戸（今の学習塾）を張ったけれど、商都大阪の地は容易に受け入れてくれなかった。街は騒々とやかましく利益利潤を求めて走る人の多いところだった。翁はこの地をあきらめ名古屋へ、名古屋ではうまく望みの仕事に就くことができたのだろうか。

しのぶぐさに従うと『明和のはじめ頃（1764）』より奈兒屋にうつりて、はじめは商人の家人となりて、いやしきわざをもち、後はある殿人の家に仕へられけるに、おなじつらなる人どものおほかたのまじらひはせずして、暇にだにあればひたぶるにかきこもりて哥ぶみをのみいそしみ学ばれけれど、さりとてさるかたの聞こえある人などにも、ほのめかすことなく 哥などよみても、たゞおのれひとりの心やりにせられければ、さる人ありとしも たれしる人もあらざりし』と

しのぶぐさの解 「明和（1764～71）の始め頃より名古屋に移り、はじめは商人の家で下働きをしていた。後に身分の高い人の家に仕えたが同じ仕事をしている人々と余り親しく話したり遊んだりせず、こつこつと一人で暇があればもっぱら歌をつくったり学問の研究にいそしんでいた。そうかといってその道にかなり上達しているといわれる人々とも打ちとけること

もせず、自分のつくった歌などを他の人々に発表することなく自分一人だけのよろこびとしていたので、誰も翁の存在をしる人はなかった」と

翁の控え目というか、孤独的というか、誰に自分の力を打ち明けることもなく、消極的な暮し振りだったようである。だがここに一大転機となる時がやって来た。

再びしのぶぐさによると「安永のはじめ（1772）ばかりに、狂哥といふものかきあつめたる冊子のあ
るを見て、其歌どものよしあし、また後の世のならはしにて いにしへのことわりにたがへる事どものあるなど
をふとあげつらひて、物にかきつけられたりしが こゝかしことちりほへるより、はじめてかゝる人ありと こゝ
らの人のしる事にはなれりけり、かくてなにがしくれがしみたり四人いと心にくき人に思ひて、たゞめをこひて
哥ぶみのことどもを とひきくに、よそにきゝたりしよりは近まさりして めでたくたふとき事どもなりければ、
かゝる人をかくておきたらんはあたらしき事なりとて、又おなじ心なる人どち これかれかたらひあはせてつか
へをしりぞかせて、なにがしの所に住どころものしてむかへいれて、もはらいにしへ学びの大人となんあかまへ
ける」

しのぶぐさの解「安永（1772～1780）のはじめごろ狂歌（おどけた調子の歌）が流行した。あるとき狂歌集を見られ

て、その歌のよい、わるいや、今の慣習で昔からのしきたりと違っていることなどを指摘して一つの本にされた。それがあちこちに広がり、こんな人が居たんだと人々の話題にのぼるようになった。このようにして一人、二人、三人、四人と次々にひろがっていった。直接翁と会って歌のことを尋ねる人もでき、今まで聞いていたよりも身近かで親しみ易く上品でりっぱな人だと評判になった。そしてこの様にすぐれた力を持っている人を埋もれさせておいてはよくないと同じ気持ちの人々が集まり、今のつとめをやめて、もっと名前の知られた所に住んでもらって古典の勉強や古学の勉強の先生になってもらおうと迎えられることになった。」

こうしてとんとん拍子に話が進み、小桜町の桜天神の傍にあった⑤霊岳院に住み、桜天神の社僧という仕事につくことになった。そして公然と詠歌の道及び古学の講筵を開くことになり日常生活はもとより精神生活も安定し、大阪時代から約十年の放浪であったが遍歴時代は終わることになった。こうして名古屋が終生定住の地となった。五十才前後であったでしょう。

⑤霊岳院―山号を桜花山といい万松寺末でありその住職は世々桜天神に奉仕した。明治五年（1872）廃寺となる。

5. 名古屋に国学の塾を開く

桜天神の社僧として腰を据えた翁は規則正しく厳肅に社務に奉仕していたが、残る時間の大部分は門人誘掖に熱意をみせていた。その講義の一部は詠歌法、二部は万葉講座で、翁の得意とするところで古語の究明を行い一首一首に新風を吹きこんで一部の詠歌への示唆となっていた。三部は平安朝の物語、日記類歌集の講読だった。こうした翁の出現は当時の名古屋文化会にとって目新しい清新な一つの躍進であった。この講筵に列しようとする新進気鋭の士は日に夜をついで続々と集まり、ついに三百人を数えるに至った。その中には名古屋国学界の有力な構成者となった人が多く顔を並べていたといわれる。こうして翁は名古屋国学界の開拓者と称せられるに至った。

このところをしのぶぐさは『さて翁の常のおこなひよ 着ものくひもの住どころ又女のうへなども露心なくて、よろつたゝあるにものしてふみ見 哥よむよりほかはなす事なくて、いみじうめでたく おほかたの人の絶て およばぬさまになんありける。かくてはさとりたりなどいふ法師のおこなひにひとしともいふべけれど、するくすしきかたはなく ものゝ哀をしろといふやまとだましひいみじくて、いたり深くまめくしに翁のなんいましける』

しのぶさの解「翁の日常の生活よりは着るもの食べるもの住居など又結婚もせず女性のことなどてんで関心がなく、すべて物があるまま 与えられたそのものに満足して、書物を読んだり歌を詠むことの外は手をつけようとせず、普通の人々とは甚だしくかけ離れていて、人々の到底まねのできる状態ではありません。悟りを開いたすぐれた修験者のようだとも言われたが、そんな奇得な方ではなく、物のあわれを知るといふ情深く、篤実な日本人のこころを深く持った生き生きと眼を輝かせている翁でした。」

又⑥養老名所案内は次の様な逸話を伝えている『隣村某家より道磨を聘し万葉集を講ぜん事を乞ふ。而して道磨性素朴を好み、衣服などには敢て頓着なく、至れば、即ち道磨の弊衣なるを見て誤りて道磨の僕と思ひ、長屋脇なる一小室を以て是に当て冷遇甚だし。今日道磨先生は何か支障ありしやと。道磨笑て曰く、吾則道磨なりと。主人愕然として書院に誘ひ大に詫びて叮嚀に待遇し、前とは雲泥の相違にして講を終わりにて帰れりといふ。』

養老名所案内の解「近くのある人から道磨を先生に招いて万葉集の講義をしたらう会が計画された。道磨は生まれつき飾りけのないことを好み、衣服などには余り気をつかう方ではなかった。だから外出だといって衣服を改めることもなく普段着のまま出かけられた。招かれた家を訪れたところ、道磨の粗末な服をみてこの人は下男だと思ひ込み、長屋脇の小さな部屋に案内し手厚いもてなしはしなかった。そして今日は道磨先生は何か都合が悪くてお越しいただけないかと質した。私が道磨ですよとの答えに主人は腰をぬかすほどびくりして、早速立派なつくりの書院の間に通し心から失礼のことをお詫びし叮嚀に待遇された。前と全く違う手厚い待遇の中で無事講義を終わって帰られたという。」

ともあれ、真の翁はいよいよ好学の虜となつて寝食を忘れ、しきりに論難の好敵手、一かどの相談相手、さら

には示唆を受けるに足る先学の士を求めて四方に眼を配っていました。この時大きく現れたのが伊勢松阪の本居宣長だった。

⑥ 養老名所案内―明治二十九年七月（1896） 佐藤栄之助著

6. 本居宣長との対面そして入門

安永六年（1777）五十四才の時、七月十八日名古屋出立、松阪に向い廿日朝松阪着。直ちに鈴屋を訪れ宣長に初めて対面することができた。其の折の模様を歌集「田中道全集」によると廿日朝本居宣長先生にあひてよみて奉ると前書して

いせの海 千尋の浜に 愛八師 玉はよるとふ さゝらかに
錦のうらに 浦くはし

貝はよるとふ その玉を ひりひてしかと たもとほり

こしくもしるく 吾背子か 愛き教に

其かひの かひこそ有けれ やゝゝに 磯間いたとり 浦つたひ

ひりひ得まくは 白玉真珠

反 歌

伊勢の海の 清き渚の 白玉を 袖にこきる、 けふのたぬしき

と五七音で長歌を詠まれている。

うたの意訳「伊勢の海の深い深いところに美しい玉があるといわれている。さらさらと清らかな音と共にきれいな貝が集まっている。その中に一つの玉を拾いたいとあちこち探しているとき、はからずも美事な玉を拾ったと同様に、輝やかしい研究をして居られる宣長先生にやつとやつとお会いすることができた。それは長い長い時間をかけて、ようやく白玉真珠を手にいれることができたうれしさだ。

反歌とは長歌の終わりによみ添える短歌のことです、前歌の大意を歌い、また補足するもので、歌は長年の願望であった本居宣長先生に直接お会いすることができた。それは伊勢の海辺に清らかな白い玉を拾った様に嬉しい、楽しい今日だった。」

又、本居先生に奉るとして

あきつしまの 大人なる物を 飯高の人とそ人も もとなおもひし

歌意「宣長先生は日本の国の大学者であるとみんな思い心から敬っています」

次で「山辺五十師原之考」といふ書を宣長大人のみせ給へるによみて奉る歌として

我せこか　こゝをしへし山の辺の三井の真清水くみてそあかし
山の辺のいしの原なる真清水は汲てのちこそさやけしといはめ

歌意「この本は賀茂真淵先生のことを^か書かれた書といわ^{しよ}れている。先生がお見せ下さった本は早速研究したく思います。この書物はのちのち究明されることによつてはつきり証されることでしよう」

ら八首の歌が誌されており六日以上滞在されたとみられる。

以後本居宣長先生と翁との間に文通や問答が数多く交わされたようである。そして安永九年（1780）に至つて公式に誓紙を送つて門人の列に加えられることになった。

翁の入門の直接の動機について、宣長の手記に

「先年、尾張の名児屋の田中道磨といふ人、己が　おをの所属を改めたる説を聞きて、たちどころに旧來の誤りをさとり大いに感服していはく、いぬ・ぬぬ　と　をちこち・あちこちとの通ひはあれど、これらは何か妨ケンとして、即吾が許に来て門人となれり」と記されている。

解説 五十音図の「オ」「ワ」行に「オ」「ヲ」を配することが何時の頃から誤り伝えられて、反対になっていた。その為に仮名遣ひの研究に大きな支障を生じていた。翁は以前からその誤りを正すことを考えていたが、本居宣長は安永四年（1775）にその著書によって「オ」「ワ」行に「ヲ」を配し年来の誤りを訂正する発表をされた。これを知った翁は宣長の学識に感服し入門を決意した。

安永九年（1780）の宣長の授業門人姓名録並に鈴屋門人録に美濃多芸郡榛木村産尾張名児屋住田中道磨後道全と記されている。

時に道磨五十七才 師の宣長は五十一才だった。当時翁は三都に次ぐ名古屋ですでに多くの門人を擁し名実ともに尾張和学の頭領だった。その翁が六才の年令差も何ら気にすることなく宣長を師と仰いだのである。

鈴屋門人として伊勢の国以外の入門者は翁が最初だった。この同じ年に石見国（島根県）の人も入門されて宣長の学がいわば地方区から全国区へと広がっていったことを象徴しているように思われる。翁が鈴屋門に入っただのは自分一人ではなく数十人の弟子を連れて行われた。後の宣長門人録に見える門人四百八十八人の内、伊勢の人は百四十二人、尾張人は八十八人に算するに至ったと。

師と翁との両者の文通は頻繁に行われたようだが、直接の会見は僅か数度であつたようである。宣長手記にも「二たび三たびはこゝにも来、常はしばゝふみ通してなむ有ける」と記されている。

こんな話が伝えられている。ある日の講義中突然翁の姿が見えなくなってしまった。待っても待っても出て来られず、その日の講筵は終わりととなったが、数日を経ると翁は、けろりとして帰って来られた。一寸先生に質したい筋があつて松阪まで行つて来たのだということだった。これには門人たちも驚きあきれて、あいた口がふさがらなかったと：名古屋から松阪まで急いでも二日はかかった当時のことである。轎夫として足は鍛えられていたでしょうが簡単に往き来できることではなかったでしょう。

7. 主な研究編著

名古屋における翁の仕事は専ら著述と講義で十指にあまる述作は大方この時代になされ、三百余人の門人は殆どこの時代に集まって来た人たちである。

翁は旦夕旦暮講義と著述との上に新しい取材を積み重ねていつて、いささかも倦怠のいろを見せなかった。神への奉仕に勤めたことはいうまでもないことで、こうして歳月が流れ 安永七年（1778）には彦根での師大菅中養父を喪った。また天明元年（1781）には県居翁賀茂真淵の十三回忌を迎えている。同じ年に翁自身が六十の賀を迎えている。これより先 翁は頭髪をおろして僧形になり道全と号していた。これは靈岳院の住持として神や仏に仕える身の外觀もあつて姿を整えたのであろう。

宣長が「田中道磨頭をおろしぬと聞きてよみつかはしける」と詞書して

栲^{たく}領^{けい}布^ふの君^{きみ}が真^ま白^{はく}髪^{かみ}わ、けても有^あよそ^そよ^よけれあたら真^ま白^{はく}髪^{かみ}

歌意「木の繊維でつくった領布の様なあなたの白髪だったがほつれ乱れても有った方がよかったですね」

と詠んでいる。

何しろ翁は万葉集研究の鬼と言われるように、明けても暮れても万葉万葉だった。後半生は本造りに終始したといわれている。門人らの定例日以外の出入りを禁止していたし、時たま友人が訪ねてくると筆を持ったまままで対応したともいわれていて、日夜をわかぬ全身的な執筆生活だったことが窺える。

その編著として

①撰集万葉徴・・・代々の撰歌集中に入っている万葉集の歌を摘出し、本集と撰集と同じもの、違っていているもの、本集に作者名があるのに読み人知らずとして採れるもの、又反対に読み人知らずを明らかに作者名を示しているもの、また両集に作者を異にするなどに分類して列挙考証している。記憶力の強い者にはじめて出来る事業で、それだけに利用度も高く当時かなり普及していたようである

②万葉東語栞・・・万葉集巻十四及び巻二十の東歌から通音の詞を五十音に配して丁数及び略語例をつけたもの
③万葉集問答・・・万葉集の各歌の読み方 解釈などについて翁が疑問を書き送り本居宣長がそれに答えたもの

④ 万葉類句歌抄

⑤ 万葉集類詩略

万葉集の歌にみる同じ句や詞の使われているものを抜き出し順序よく書き並べたもの

⑥ 万葉名所歌抄・万葉集に収められている名所旧蹟などを拾い出して記したもの

⑦ 万葉集地名録・万葉集に読み込まれている地名を五十音順に収録したもの

⑧ 万葉集抄・万葉集十五卷までに略解を附したもの

⑨ 榛木翁集・翁の雑記集

⑩ 道丸随筆・主として万葉集に関する論考

⑪ 田中道麿歌集・翁の歌の収録（畔の荊穂・垣根の落葉）

⑫ 暗愚抄・翁の雑記集

⑬ 手向草・賀茂真淵十三回忌（天明元年（1781）に手向けた門人などの歌を収録したもの

⑭ 天明随筆・天明元年（1781）から同三年（1783）にいたる雑記集

⑮ 古書地名録・万葉集などにあらわれる地名の記録集

⑯ 御国詞活用抄・国語の動詞・形容詞・助動詞をその活用の仕方によって二十七会に分類し更にそれぞれの

会について各言葉の語頭音につてこれを五十音順に配属したもの

⑪新刻古今疑問・歌学に関する問答集

など挙げられるが、これらのことは記憶力がずばぬけている上に、たしかな根気力のいる困難な事業であるが
翁は全てを克服してほぼ完成に近いまでに仕上げられている。

8. 学問一途真摯な追求姿勢

万葉集などの語釈や解説についてとことん追求し、師宣長の教を仰いだり、また、新しい説を出して学界を啓発するところが少なくなかったと、更に歌中の品物（物の名）についても執拗なまでに追求の手をゆるめていない。このことについて松阪の本居宣長記念館の吉田悦之氏から教わったその数例を記す。

①『万葉集中の「冬木成」は「冬木成す」か「冬ごもり」かを考へていたら、此の月の十日の夜の曉方に夢を見、何人といふ事の覚へもなく人在て道丸に告たる心ちのせられて、冬ごもりは年内立春の対也。年内立春は春ごもりの冬といはばいふべく、今は節分の正月にあるを、冬ごもりの春といふ也と覚めたり。此の夢の説いかに侍ら、ん間奉る…』と宣長に質したところ、宣長から『御夢の説此甚だ珍説らしく聞ゆれども理窟過たり』と考える熱心さのあまり夢にまで考察をめぐらせているすごさ!!

②『宣長の「詞の玉緒」を読み、てにをはの法則を知ってからは、此ごろは夜のねざめも専ら古歌にあてて見る

に悉違ふ事なし。神代より今に及びてかくてにをは違はぬ物なるをいたうたふとくなん』と述べている。多くの歌を諳じていたからこそできる技であろう。記憶力の非凡な上に、悉く実証していく真執な姿勢に感服させられる。

これに対し宣長は『てにをはの事の玉へる条々のことごとく当れり、己れ多年此事に心をつくし、自然のてにをはの妙所を見出たるに、誠に然りと信する人、天下にありなしや、よし知る人なくとも、道麿主一人、己か功を知り玉へは己か功むなしからず。悦ひにたへすなん』と述べている。長年苦勞してやっと完成したてにをはの法則：「誰も認めてくれないけれど道麿だけが多くの歌について実証してくれた。道麿だけが私の学説を信用してくれた。私の功績が認められてこんなうれしいことはない」とよろこびをもらしている。これによっても師弟の絆が一段と深まったことは明らかである。（安永九年（1780）万葉集問答より）

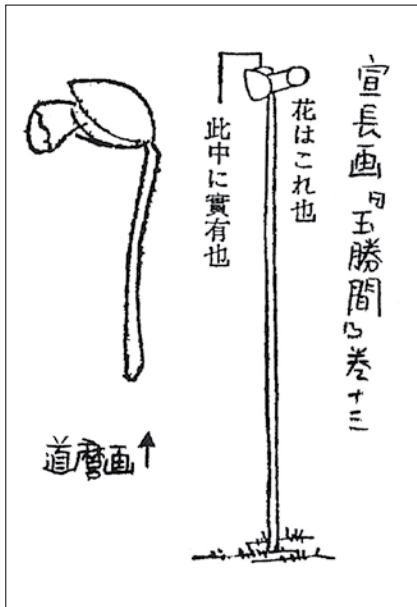
③ 万葉集卷十（2270）に

道辺之乎花我下之思草今更尔何物可將念

「道のべのをばなが本の思草今さらに何物か思はむ」

の歌がある。その思ひ草について宣長は道麿の実践報告をもとに、「思ひ草という草はいかなる草にさだかなら

ぬを、一とせ尾張の名古屋の田中の道磨が許より文のたよりに今の世にも思い草といひて、す、きの中に生る小
 さき草なむあるを、高さ三四寸あるいは五六寸ばかりにて秋の末に花さくを其色紫の黒みたるにてうち見たるは
 葦の花に似てすみれのごと色のにほひはなし、花さくころは葉はなし、古への思い草もこれにやあらむ……其
 の草のカタをも書て見せにおこせたる。そのかたはかくぞ有りける。



すすき

其の後に又あるとき花の咲きたるところへもとほりて薄のきりくひごめに竹の筒の中にうゑて、たゞに其草をも見せにおこせたるをうつしうゑて見けるに、しばしは生つきたるさまにて有しをほどなく冬枯にける。又のとしの春もえや出るとまちけるに、ついにかれて薄ながらに出ずなりにきかし」と記している。（玉勝間卷十三）

おもひぐさ―通称なんばんぎせる。す、きの根株に寄生する小さい植物・煙草用の煙管の形。
たばこ きせる

又「とねりこの木といふ木・木の色いと白く葉は榎の葉に似て大木になる物なり」。件の木、美濃国飯木村に多く有て、他村にはなしと同人いへり。飯木村はこの人の故郷也、多芸郡なり」と同集に記されている。

とねりこ櫟―モクセイ科の落葉高木山地に自生。田の畦に植える地方もある。材は強く弾力の富みバット・建築材・家具材とする。

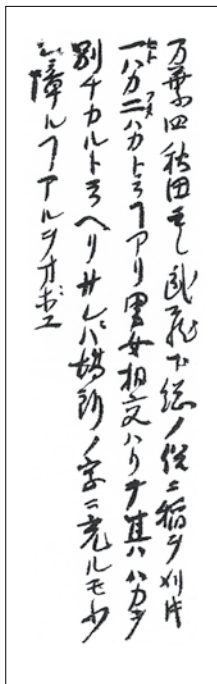
④ 大伴宿弥家持の歌（万葉集1035）

田跡川之滝乎清美香從古宮仕兼多芸乃野之上尔

「田跡川の滝を清みか古ゆ宮仕えけむ多芸の野の上に」

について「養老滝ハ伊勢ノ多度より六里バカリ也 然レ共峯ツ、キ也 但しみの養老ノ所ハ今ハ多芸山ト云テ多度ト云名ハノコラズ 養老ノ滝アル所ハ多芸ノ郡白石村と云」と書き送っている。宣長の万葉集手沢本に道麿のこの附箋がつけられている。

老翁の傳は傳はるるなり
 云ふばかりにせしれども
 但しみの老翁のわが
 ギヤミトミテもなト云名ハ
 老翁の傳はるるなり白石村ト云



かやのをとめ

秋田之穗田乃

刈婆加

香緣相者

彼所毛加人之吾乎事將成

「秋の田の穂田の刈婆加

香よりあはばそこもかひとの吾をことなさむ」

の刈ばかりについて宣長の手沢本に翁の書が残されている。

刈バカ田中麻呂云美濃尾張ナトニテ田ヲ植ルニ

タトヘバ三人シテ三ハカニ植ル五ハカニ植ルナト云也

或ハ五人シテ三八カニ植ルナト云ソハ

此図ハ三人シテ三ハカニ植ル図也余モ推テ知ヘシ

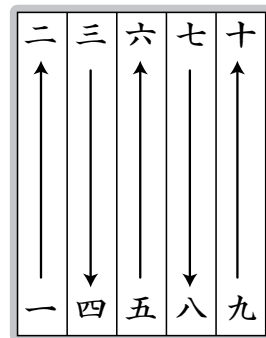
万葉四秋田□□武蔵下総ノ説二稻ヲ刈トキ

一ハカニハカト云事アリ男女相交ハリテ其ハカヲ

別チカルト云ヘリサレバ場所ノ字ニ充ルモ少

シ障ル事アルヲオボユ

又美濃国の俗、田をうゝるにも又刈るにも一はか二はかという事あり。こは道磨常に見聞く所也。たとへば一段の田を五はかにうゝるとは下の図の一の所よりうゝ初めて二へうゝゆき三、四と次第にうゝて十の所迄にうゝ終るを五はかにうゝるといふ也。一段の田をうゝるに三人して五はかにうゝるなれば五人しては三はかに植るやうの事あり。秤は^{はかり}壺貫目何匁等のあてど又枘もてはかるも壺俵に四斗入るのあてど竹尺も身のたけに衣をはかるあてど也。墓も故人を葬りしあてど也。かようのあてどなき事をはかなしといふべく。はかもなくそこはかとなく等も皆きこゆるよう也と(「道丸随筆」より)



⑥ むろの木 万葉集卷三(446)

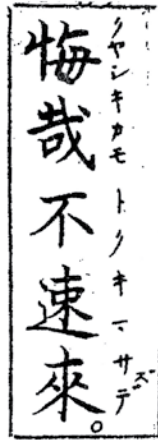
吾妹子之見師鞆浦之天木香樹者常世有跡見之人曾奈吉

「吾妹子が見し鞆^えの浦^{むら}の室の木は常世にあれど見し人ぞなき」

について宜長は「田中の道まろがいへりしは、万葉の歌によみたる室の木といふものは今もいづこにも多くある物也。美濃の不破郡多芸郡などにて ひむろともひもろ杉ともいひ、伊勢の員弁郡・桑名郡のあたりにて、たち

むろはひむろといひ、尾張の羽栗郡にて、ねずむろともべほの木ともむろともいへり。すべて山におほき木にて、地にはふと高くたつと二くさ有て、はふ方には大木はなきを立るかたには大きなるも多し、柏子びやくしんといふ木に似て又杉にも似たり。二種ともに実おほくなる也といへりき」と記している（宣長玉勝間より）

⑦ 宣長の説を訂正することも



『古事記伝』自筆稿本卷五

古事記伝の中の「悔哉不速来」を「くやしきかもとくきまさで」と読んでいたのを翁はずを補って「くやしきかもとくきまさずて」ではないかと申言した。宣長は「実に己が心に符合したり」と認め今までの説を訂正された。

⑧ 翁よりふるさとの話として宣長に伝えられたと言われること

おしとたかべ 万葉集（258）「人漕がずあらくも著しかつ潜おしきする鴛鴦とたかべと船の上に住む」について「たかべといへるは鴨の小さき物にて鳩の大さしたり。道丸が古郷にはいと沢にむれるる鳥也。しかるに尾張の国に

てはタカベという名をしれる人なし」と

たかべーこがもの古名。鵬・沈鳧（三省堂大辞林1995・11・3第2版机上版より）

⑨ あしびとあせほ「磯かげの見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜しも」

「鴛鴦の住む君がこの山齋^{しま}今日見れば馬酔木の花も咲きにけるかも」があるが、この馬酔木について「美濃榛木村の庄屋新五郎兵衛といふ人があせほの灰汁のまじれる湯にて誤りて馬を洗ひ、その馬の瘦せることを道丸に語りし也」と

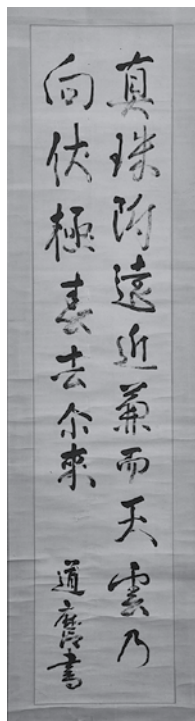
あしびー通称あせび・あせほとも。有毒。葉汁は殺虫薬に利用される

9. 作品 書と歌

【1】遺墨作品

○春去尔来

条巾 養老町文化財指定 田中道磨翁顕彰会蔵



眞珠またまづく附遠近兼而天雲をらこちかねてあまぐもの乃
向伏極むかふすきはみはるさりにけり春去尔来 道磨書

眞珠附—珠をつける緒。おちこちにかゝる枕詞

○立春と歳暮

懷紙 養老町文化財指定 田中道磨翁顕彰会蔵

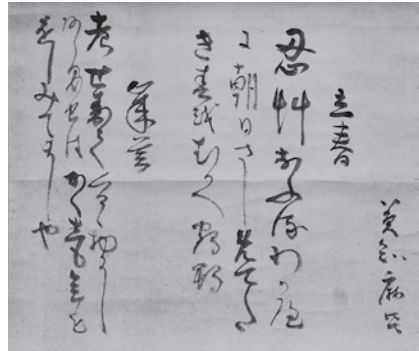
・立春

美知麻呂

忍艸^{しのぶぐさ}おふ流^{なが}わ可^べ屋^や
尔^に朝^あ日^ひさし免^めて多^た
き春^{はる}越^こむ可^べへ鶴^{つる}鴨^{かも}

・歳暮

老^{おい}せ寿^ず天^{てん}くる、物^{もの}尔^にし
阿^あり万^ませは^はかく志^しも年^{とし}を
遠^おし^にみて尔^にしや



忍草の生い茂っている

我が家にも、朝日がさし込み

め度たい春を迎えることができま
した。

年を取らないで、即ち老人になら
ないで年越しができるものである
ならば、

こんなに年の暮れるのを惜しいと
思わないのに。

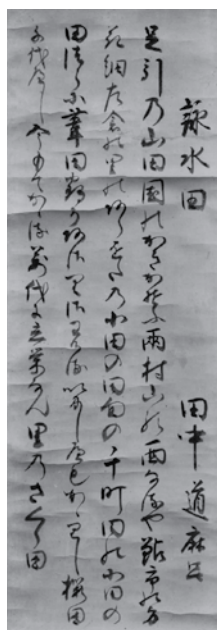
○詠 水田

条巾 養老町文化財指定 田中道麿翁顯彰会蔵

詠水田

田中道麻呂

あしびきのやまだのくにの
足引乃山田国能かきか楚ふ両村山の西奈流や鮎市の方
はなぐわしくらのさとのあ
花細佐倉能里能阿らを多乃小田の田面の千町田の小田の
田徒ら^づ_{にあしたつるぞ}鶴曾阿佐里佐王^わけ流^る以^い尔^にし遍^へ毛^もか、里^りし桜田
千世遍^へし今もてか、流^る萬代^{よろづよ}尔立榮奈ん里乃^{さとの}さくら田



足引―山にかゝる枕詞
両村山―東三河にある山
鮎市の方―名古屋地方にあった地名
花細―花が美しい

○冬日同詠真常四十賀歌

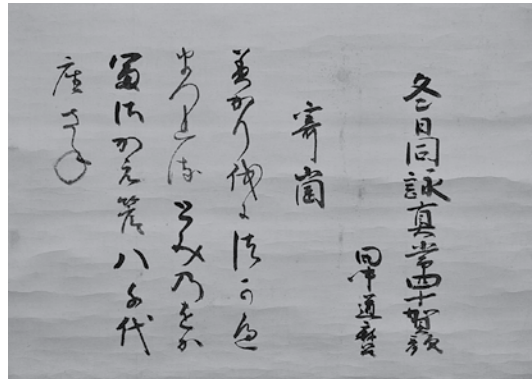
懷紙 養老町文化財指定 田中道磨翁頭彰会藏

寄崗

田中道磨

美^みかり伐^ば爾^に徒^つ可^か遍^へ
まつ連^れ流^るとみ乃^のをか
富^{とみ}佐^さかえ管^つ八^や千^ち代^よ
座^{おわ}さ年^ね

真常―松下真常 信濃屋久兵衛とも松根ともかく



○秋日同詠鹿歌

養老町文化財指定 個人蔵

道麻呂

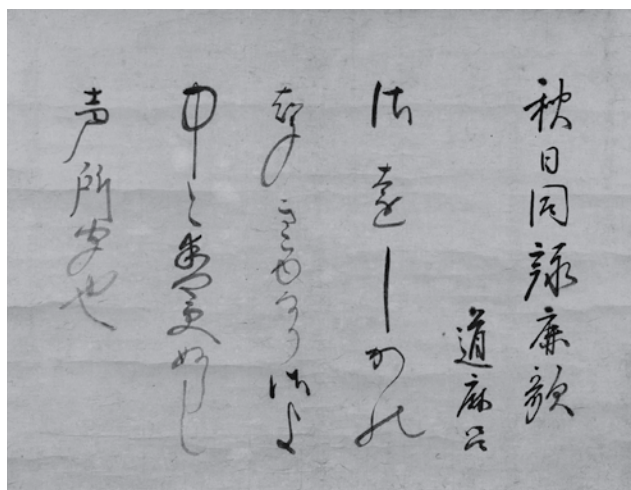
佐^さ遠^をしか能^の

聲^{こえ}きこゆ奈^なり佐^さよ

中^の之盛^い更^やぬらし

声^{こゑ}所聞^{きこ}也^{なり}

翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で
特別展示された田中道麿展目録から収録



○小川道足ぬしによみてつかはす

養老町文化財指定 個人蔵

小川道足ぬし^によみて付可^はハ須^す

久方^{ひさかたの}の天津神代^{あまつ}乃^の

婦^ふること越志^{をし}ぬハ須阿賀^{すあ}せ

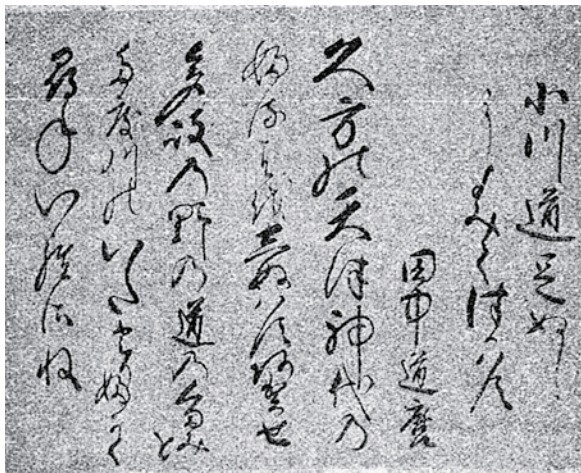
多岐^{たき}乃^の野乃^の道乃^のく万^まみを

多度川^{たどがわ}能^のい多登^とり婦^ふ可^かく

尋年^{たづね}い羅佐^{らさ}ね

田中道磨

翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で
特別展示された田中道磨展目録から収録



○詠扇

大垣市立図書館蔵

霰打阿羅々松原委曲あらうつあらまつばらつぶらか

尔君手将齋懇尔君手保にきみをいわねんごろにきみをほ

吉豆牟福艸乃幸在君空きてんふくぐさのさちあるきみのうつ

蝉乃世乃尽尔せみのよのこころに 樂久世将経たのしくよをへなさん

君霰打荒々松原 真委二きみあられうつあらまつばら まつぶさに

荣将座登高々尔さかえまさんどたかだかに 荣将座登さかえまさんと

母多勢流此扇乃もたせるこのおうぎの 末広良二登すえひろらにと

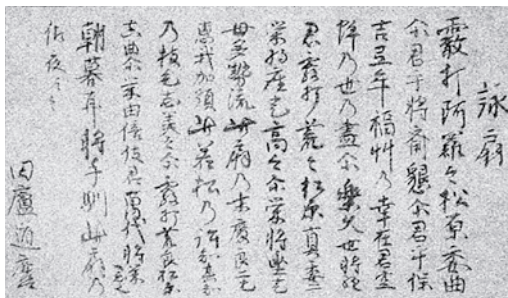
惠我加須此若松乃えがかすこのわかまつの 許知其知こちごち

乃枝毛志美々尔のえだもしみみに 霰打荒良松原あられうつあらまつばら

真曲尔まつぶさに 荣由倍伎君万代将荣君之さかゆべききみよろよにさかえんきみの

霰打阿羅々—松原にかゝる枕詞

委曲—円らか、円くふつくらとしてゐる



あさゆうにてにもちなるこのおきの
朝暮耳将手馴此扇乃

さやさや
佐夜々々

田廬道磨

廬一ろ・粗末な家

翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で特別展示された田中道磨展目録から収録

○詠芽子

短冊 個人蔵

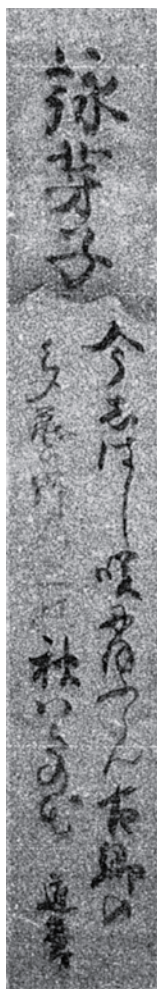
さきにほ
今志はし咲丹保ふらん古郷の

(句ふ)

多芸野上辺の秋ハきの花

(萩)

道磨



翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で特別展示された田中道磨展目録から収録

○揖取魚彦に献る歌 個人蔵

翁は二回江戸に赴き安永二年（1772）二月数ヶ月の間滞在して賀茂真
淵の巨匠揖取魚彦と親交を結んだ

揖取魚彦かとりなひこにたてまつるうた
流哥りゅうか

無佐志年むさしね乃麓のふもとの里さとによる奈ミなみの音

（武蔵の国嶺）

（波）

よりきこえて夏衣なつぎかとり能のをぢハは

（揖取）

（翁）

浅ちふのちふのい本りに 古と玉の

（葦の生えている所）

（庵）

（言霊）

さきハふ国能のふることを今のをつゝ、尔

（今の世、現在）

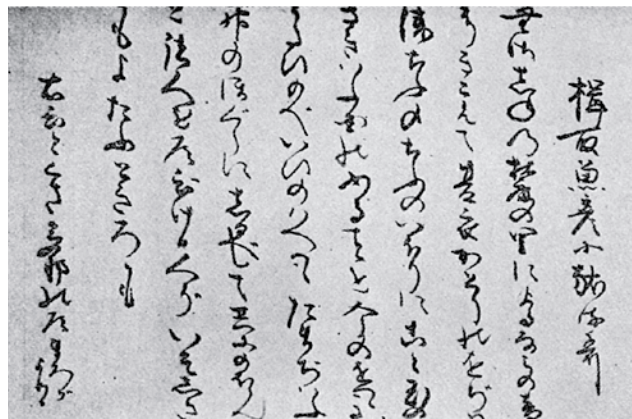
う多ひのべ いひのハへつゝ、たまぢハふ

（言ひ表わす）

（人の霊を幸ならしめる意）

神のほぐらに志るべして 共尔の本らん

（宝庫）



と諸人を道飛ける人曾 いそ志き

(導く)

(勤しむ)

かもよ たふときろ可も

(導) (語調をととのえる語)

右飛とくさ 多那の道まろ可

(一草)

よめる

揖取魚彦―今の千葉県香取佐原の人。賀茂真淵の門に入って古学を学び詠歌に長じた。明和二年(1765)江戸に出てその居を茅生庵と名づけ古歌古文を唱導した。著書に万葉集千歌・古言梯檣の葉・揖取魚彦集等がある。天明二年(1782)没六十才

翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で特別展示された田中道磨展目録から収録

○保伎宇多

懷紙 個人藏

あ満と婦や多加多の郷

水多満流久保田ぬし

雨婦らは高田潤ひ日のてらは

く保多佐かハえ雨婦里天日能

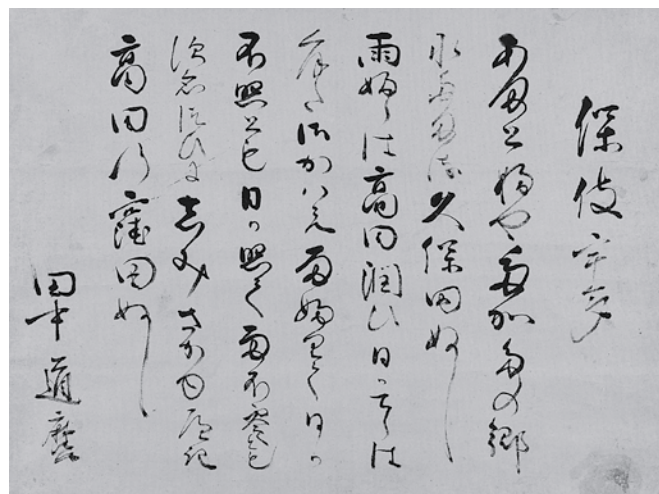
不照と毛日の照天雨不零と毛

須衣徒ひ尔志みさかゆ遍起

高田乃窪田ぬし

田中道磨

翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で
特別展示された田中道磨展目録から収録



○多芸人績芋乎送歌

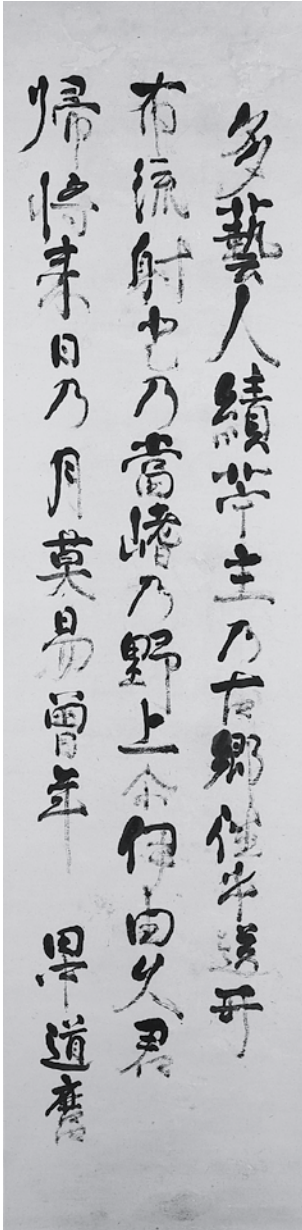
条巾 個人蔵

多芸人績芋主乃古郷往乎送歌

布流射登乃当嗜乃野上尔伊由久君

帰埒来日乃月莫易曾年

田中道磨



翁の遺墨作品は平成七年十二月養老町郷土資料館で特別展示された田中道磨展目録から収録

【2】道全集より歌

○田跡川の歌

以下歌の作成時の年齢と道全集の整理番号を記す

老人の若ゆてう名の滝のせはわか住里に流れこそすれ

34才 5

田跡川の瀬々の氷もきようとけて春はきにけり多芸の野の上に

36才 19

山居
わが庵は老いを養う滝つせの枕にひびく多芸の野の原

42才 85

立春
多芸の野に鶯なくも田跡川に春は来ぬらし鶯なくも

45才 105

祝言
治まれる御代のためしか田跡川の老を養うたきつ岩道

46才 155

同じ文字
ある歌
田跡川の滝だにみえず秋と共に霧立のぼるたきの野の原

47才 282

田跡川のうた
十首の中より
老人を養う御代の春にあひて名におう滝のおとぞさやけき

47才 353

郡の歌

早苗

寄山賀

夏きてはまづ結ぶ手の雫にもにござ清き田跡の川水

47
才
354

多芸の原の萩の錦をぬわんとや霧立秋の滝の白糸

47
才
355

妹らがりにいたどり行つ田跡川のたぎつ早瀬の我こころから

47
才
356

なとあれと契りし事を田跡川の滝つ瀬のごとたゆと思うな

47
才
357

春されば滝つ山川に住魚のわかゆてう田跡の川水

47
才
358

老人を養う滝の水てや田跡の川音きこえざるらん

47
才
375

おちたきつ田跡の川水先汲て待えし春にわかえつつみん

48
才
515

田跡川の水をせきれて少女等が五百代小田をきようぞうなる

54
才
817

いは万千いはの年ふとも田跡のみ山のつくる日あらめや

55
才
968

かきくもり小雨そほふる田跡川の滝のほとりは夏も寒けし

56
才
922

○同じ文字がある歌

一首の中に同じ文字が五ヶ所に詠み込まれている

春(い) 春のいろのいたりにけりな泉川岩間の氷今はとけつつ

53
才

268

夏(す) 鶯のかりす巢立し時鳥ほととぎ五月のやまにたえずしはなく

53
才

279

秋(ち) ちちに待しこよひ夜霧の立みちてかたちかうそう星合の空

53
才

283

冬(ひ) 大ひえやをひえひらのねあらそひて日毎に雪の積りけるかも

53
才

293

雑(る) よる昼をわかす流るる川水はたえぬ教の道にや有らん

53
才

309

○同じ文字なき歌

梓弓春きにけりなわか庵をとよもしやまぬ鶯の声

48
才

399

あさひけに世をへてみれてたきのせはいやめつらしくおもほゆるかな

48
才

406

○あそびの歌四十七言（同じ文字が重複しないようにして歌をつくる）

すみの江^えなる 田^たゐにさをとめ 早^わ稲^せうゑぬ 稲^{いね}かりてよ
 落^{おち}穂^ほひろへ子^こら そゆしも 麦^{むぎ}まけ 粟^{あわ}生^ふつくれや

57
才
1022

○生類草木物名を詠んだ歌

馬 鮭 蚤 狸^{ねずの}木 榎 蛙 氷魚 松 枳 桐 檉 鯉 鴨 藻
 うまさけの三 室 山こえかへる 日を待つと契りし君恋しきも

48
才
402

蚊 桑 雁 蚤 蟻 鰐 芝 柴 藻 河豚 烏 大辛螺 鳥毛虫 石陰子
 かくばかり水のみなわにしばしばもふくから涼し 秋の川風

48
才
403

能登 大和 若狭 豊 安芸 紀 但馬 甲斐 志摩 佐渡
 野と山とわかざることよ 秋 霧の立ちまがひてします虫^{虫くい不明}の里

53
才
305

槻 桧 女貞 檜 枇杷 穀 桐 柴 栲 梓 樅
 月日たつならひはたれからきりてし花さくあつき 紅葉ちる雪

53
才
211

十二支

子 旅ねをはうしとやとらてうき雲の立田の峯をよはにこえつる

48才
551

午 未 申 酉 戌 亥

真人はぬれひつ時雨晴さるにひとりいぬなるいな山へに

48才
552

たらばな

父母の飛かけりつ、はく、むにいつしかひなのたちはならいぬ

53才
225

あまかえる

雨雲の棚引けらしさよ更てこのもかのもになくあまかえる

53才
323

時鳥

時今は夏成りぬとほととぎす わきへの里に声かすれなく

48才
807

月

百伝ういわれの池の水面にやどるも清き秋のよの月

49才
705

藤

池水の鏡にかけをうつしつ、みなきりたきつ花の藤浪

47才
197

松

春の雨秋の時雨と年をへてみの、お山の松もふりにき

53才
267

山吹

妹ににる花とそみつるわか宿の垣ほにさける八重山ふきの花

54才
872

○折句

各句の上に物の名などを一字ずつ置いたもの

梅の花

玉椿

忍草

打・な・ひ・き　め・は・る・草・木・に・野・山・し・も・春・め・く・色・と・成・り・に・け・ら・す・や
 立・春・を・ま・つ・こ・そ・人・に・告・に・け・れ・花・さ・く・枝・に・き・い・る・う・く・い・す
 白・雪・は・軒・も・ひ・と・つ・に・ふ・り・積・も・り・く・ら・せ・る・宵・の・寒・く・も・あ・る・哉

49
オ

694

49
オ

690

49
オ

643

○旋頭歌

五七七・五七七の六句からなり、初の五七七三句で一段落となつて更に別に次の五七七を起こすもの

麻衣 木曾路の川の 水かさ増り

いせの海 清き流れに 塩みつらんか

雁金^{かりがね}の 雲井をわたる 声聞ゆ也

我為の 秋かと思ふ よはのねさめは

46
才
147

36
才
23

○長歌

五音七音の二句を一つの単位としていくつか重ねていき終わりを五七七で結ぶ形式の歌

新築を賀

松木乃	まつのけの	常磐堅盤尔	ときわかきに	檀木乃	かしのけの	弥立栄	いやたちさかえ
産子乃	うますこの	弥継々尔	いやつぎつぎに	正木葛	まさきづら	絶事無	たゆることなく
幾世鴨	いくよかも	往来之家尔	ゆききのいえに	片原尔	かたはらに	真木柱立	まきはしらたて
事更尔	ことさらに	新室造	にいむろつくり	香青成	かあおなす	畳取敷	たたみどりしき
多怒志気久	たぬしけく	往為吾背者	すますあかせは	花木乎	はなのきを	園辺植	そのべにうえな
時々乃	ときどきの	花將見登鴨	はなみんどかも	朝夕尔	あさなゆうなに		

57
才

1004

10. 死去と奥津城

みんなから六十の賀を祝ってもらった頃の翁は、びん／＼していて血色もよく健康そのものようであつたが翌天明四年（1784）になると体の異状を感じるようになった。

宣長からの四月十八日付の書簡によると、「御口中の痛、爾今以全快ならざるよし、長き御事に御座候。是は御齒に候哉・御舌に候哉。凡一日に二三十度以冷水ふくみ御試成さるべく候」と医者らしくひどく氣にしているようだった。

はじめは口中の痛みから始まったようだ。更に八月十八日付には「御病氣日を追つて御快復さるべく候間 随分々々御保養專一に存じ奉り候」とあつてもう全体的にかなりの重態であつたのでなからうか。

翁が郷里の柏瀬藤左衛門に宛た手紙の中に「去々月十三日より当地の内もあるき不申、愚宅にてのよみ物もななく 只々療治一件に相かゝり居り申し候仕合、かくてはよしや近き内に本復に至り候とも、急に力づき旅行等となりさうなる事とも相見え不申、何れの道にも盆前には全快申す間敷き様子に相成り申し候……。食物も三度ながら白かゆに糍味噌の外には口中に叶うものなし……。然共其かゆを一日に白米三合程のあてにたべ申候へば小

食と申にも御座無く候」と記している。

攣腕れんたんという手足が痺しびれ曲って伸びない病氣だったといわれ、これは中風の昂じたものといわれている。翁も随

分苦しまれた模様で

「われゆのち 世にへん人よ あめつちのかゝる怒りに 相あうなゆめ」と詠い残している。

病状の悪化につれて人手の少ない霊岳院では不便だということで、近くの常瑞寺に引きとられていた。常瑞寺の住職は翁の弟子であった⑦了榮和尚である。病は一進一退 住職了榮の手厚い看護にみとられながら秋を越えたが、十月四日夜の六ツ時（午後六時頃）息を引きとった。享年六十一才。六日了榮和尚を導師として葬儀執行 同寺裏手の墓域に葬られた。諡は言靈有功老翁ことだまいさをおのぢ。

辞世の歌 けふからも 横さま風のおほひこは 命をしけど すべしらましや

⑦了榮和尚―常瑞寺第七世、はじめ道磨に学び のち鈴屋について国学を取めた。また、暮雨巷曉台について俳諧をよくした。文政三年（1820）六月二日没六十二才。

翁の死去は当時の名古屋の国学者・知識人・各地の知己門人のいたく悼むところであったが、最も大きな痛手を受けたのは師である本居宣長であったのではなからうか。

翁の死の知らせを受けた宣長は

「夢かも およづれかも (たわごと人をつくりごと) 道まろは いのちしにきと 玉づきの 人ぞつげ

る えかなしゑ ひさしに見ねば 恋しけく 有けるものを えかなしゑ 我

はかなしゑ 世の中に いひつぎきたる (神無月) かみな月 神なき月と (霊位の活動する) たまちはす

神もなければ 言たまの (霊) 道いそし (効) みし 道まろを いのちしにきと きく

がかなしき」

と長歌をよせている。また、鈴屋門人たちによる歌が『かなしゑ集』として残されている。

尚寛政十二年（1800）十七回忌になっても忘れられず懐旧の憶いを次のように詠んでいる。

「さそはれし 時雨の雲の跡とほく 年のふるにも 袖はぬれけり」

お墓は常瑞寺墓域に建てられたが、昭和二十年（1945）第二次世界大戦での名古屋大空襲にあたり常瑞寺も全焼。墓域もひっくり返ってめちゃくちゃになってしまった。その後同寺の堂宇は新築され、残存の墓碑は一まとめにして平和公園に移された。

そののち無縁仏である墓石が、幾多の困難にさらされ多年の星霜に堪えながら敵弾の爆破もまぬがれて、常瑞

寺墓域の無縁仏の域内に昔のまゝの姿で建てられた。

昭和三十二年（1957）養老町に田中道磨翁顕彰会が設立されて以来、毎年同会の有志による墓参が行われている。昭和五十一年（1976）に台石を二段に積み重ねて卓出させ「国学者田中道磨翁墓所」の石標を立て墓前祭を挙行した。



整備された田中道磨墓所（平和公園常瑞寺墓域内）
中西慶爾 1977『稿本 田中道磨伝』より

墓石 右 天明四年辰十月四日卒同六日葬

正面 田中道全墓

左 右長者町常瑞寺 但陳末行見

（陳—忠陳 但末行見—墓碑銘を書いたがまだ見ていないの意か・但書を添えたのであろう）

11. 翁住舎趾碑

名古屋の霊岳院の境内に田中道磨翁住舎の趾なる碑が建てられていた。翁の三回忌にあたる天明六年（1786）に朝夕にこれを仰ぎ追憶の情を新たにしようという知己の門人の手によって建立されていた。

中央に『美濃国多芸郡榛木村人田中道磨住居之趾』の十八文字を置き、左右に宣長の歌二首が万葉仮名で刻まれていた。

ところがこの記念碑がいつの間にか消え去ってその姿を隠してしまった。ぶっ倒れて土中に埋まり泥まみれになり少しばかり顔を出していたのを、二十人ばかりの地元の豪商たちが資金を出し合って天満宮御堂西の手水鉢北に改めて建て直した。それが又時を経て明治維新前後に至り世の中ががらりと変って、見向きをする人もなくなりどこなく消え去ってしまった。土地の人の話によると世の流れと共にその価値を失って埋められてしまったか、土台石・階段・又は切断されて飛石のようなものになっているかもしれないと言うのであると。昭和五十二年（1977）発刊の中西慶爾氏の「田中道磨伝（木耳社）」に記されている。尚同氏は続いて「養老名所案内」に碑に関する記事を見たとき次の様に記されている。

「郷里なる榛木村に建てんとしたが当時徳川幕府の時代で村の人々は『道麿は譬へ学問は如何程ありとも門閥なき賤しきものなれば…』とて立つることを肯んぜる故に惜しいかな其石碑は建てずして止みたり」と。

しかし石碑の写を得たれば掲ぐと、

その養老名所案内について平成二十二年

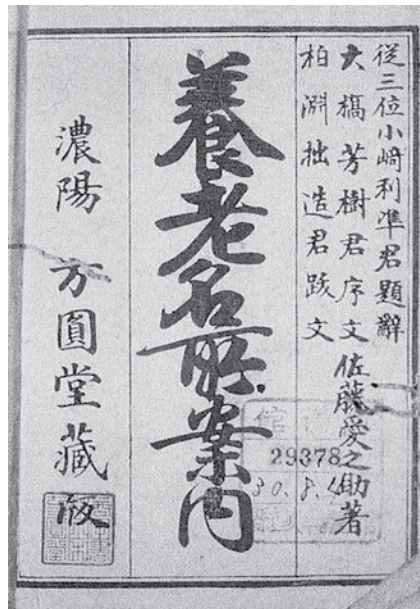
(2010) 一月六日養老町図書館にこの記録のあることが確認できた。

再び中西氏著によると、宣長の自選歌(天明二年(1782)より同六年(1786)まで)の中に

○聞て来て見む人しぬべはりの木の田中のをぢがいへ所これ

○はしけやしみぬの国人榛の木のをぢが形見のはりの木あせを

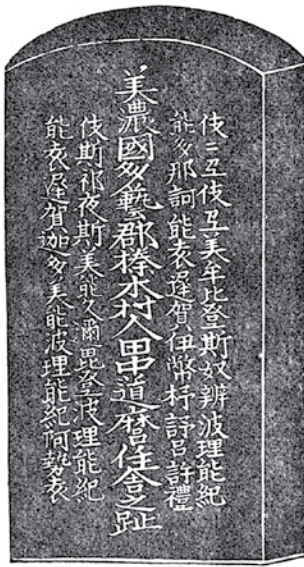
の二首が記されてをり、又詞書に「田中道麿が年頃すみける家のあとに、尾張国名古屋の霊岳院の内に立つべき石ぶみにゑりつくべき歌かのともがらのこへるによみてつかはす」とあり、次に「道麿は美濃国たきの郡榛木村



明治 29 年 7 月 18 日発行

の人にて、やがてはりの木をぢとなむみづからなのりける、さてなむ跡のしるしにも榛木を植けむ」と記されていると。ここから推察すると養老名所案内に記されている様な郷里の榛木村に建立されることは始めから無かつたことではないだろうか。

さらに昭和三十二年（1957）に郷里養老町飯木に建立された田中道磨翁顕彰碑の碑文の中にも（明治神宮々司 鷹司信輔氏題）「宣長その死を悼み霊前に告ぐる詞を述べて万葉研究の功績を賞し言霊有功老翁と称す。又門人の名古屋霊岳院に追悼の碑を建つるに際し特に翁を偲ぶ和歌二首を刻せしむ……」とあり名古屋霊岳院内に建立されたことは確かなことでありましょう。



田中道磨住舎趾碑（『養老名所案内』所蔵）

伎き々き互て伎き互て美み牟む比ひ登と斯し奴ぬ弁べ波は理り能の紀き
能の多た那な訶か能の衰を遅ち賀が伊い幣へ杼と許こ呂ろ許れ礼

美濃国多芸郡飯木村人田中道磨住舎之趾

伎き斯し祁け夜や斯し美み能の久く迹に毘ひ登と波は理り能の紀き
能の衰を遅ち賀が迦か多た美み能の波は理り能の紀き阿あ勢せ衰

追悼碑について（住舎趾碑）

○追悼碑の「写」といい拓本でも写真でもない。誰かが写しとったものであろう。だから碑の大きさも形もよくわからない。

○尚万葉仮名による宣長の歌の二首目

「はしけやしみぬの 国人榛の木のをぢが 形見のはりの木あせを」

伎^き斯^し祁^け夜^や斯^し美^み○能^の久^く迹^に毘^ひ登^と波^は理^り能^の紀^き能^の袁^を遅^ぢ賀^が迦^か多^た美^み能^の波^は理^り能^の紀^き阿^あ勢^せ袁^を

○前記の宣長の歌からみれば頭の伎^きは波の誤りではないか また途中7字目の○ぬの字が脱けているのではないか。それは一首目の歌からすれば奴でないか。

12. 顕彰碑

翁の偉大さを仰欽して永く後世にその名を伝えるために、昭和三十二年（1957）七月に『田中道麿翁顕彰会』が結成された。そして同年十月四日翁の祥月命日にゆかりの地、飯の木の源氏橋のほとりに堂々たる顕彰碑が建立された。建設資金は町内総動員の形で同町出身の成功者・町の有志者・地元の有志の人々・その他の献金をもととし小学校児童の一円義捐まで加えて、当時のお金で五十万円という多額であったと。建設地は養老町滝谷が津屋川へ流れ込むところ約二十アールばかりが、もと国有地であったのを町が譲り受け公園化し観光探訪の地としている。

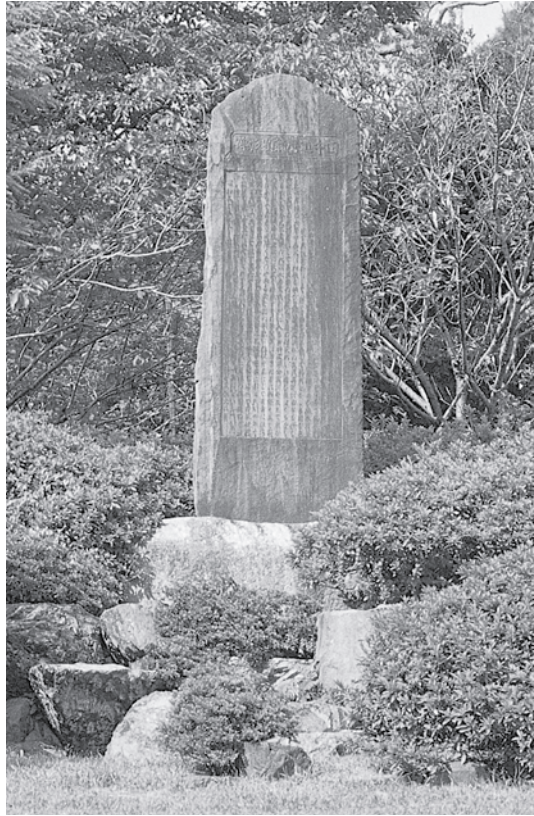
碑の題額は神社本庁統理明治神宮々々司であつた鷹司信輔氏・銘は国語院大学々々長であつた河野省三博士の撰并に書によつたもの。高さ約三米、巾一・三米の仙台石で、彫工は桑名の石工 石市氏、台地は郷党の庭師伊藤氏が担当された。

碑文 神社本庁統理明治神宮々々司 鷹司信輔題額

郷土の文化を飾る者は自ら国家の学芸を進め 国家の文運に参加する者はやがて郷土の歴史に寄与す 美濃

国多芸郡榛木即ち現今の岐阜県養老郡養老町飯の木に生まれ 江戸時代中葉の国学者として著聞する田中道磨翁は 万葉研究に秀で専らその学風を名古屋方面に高揚し門人三百余名に上る 通称を庄兵衛と云ひ榛木翁と号し晩年道全と称す 天性素朴にして幼より学を好み長じて轎夫となり良師を求む 先ず彦根の大菅中養父に和歌を学び更に遠江国浜松の賀茂真淵に古学を修む 真淵は国学の開拓者にして万葉集の権威なり 翁の研究大いに進む 幾ばくもなく師を失ひ安永九年国学の大家本居宣長の門に入る 当時国学全国に普及して我が国民の敬神好学崇祖愛郷の氣風を培養す その学問夙に中京地方に興隆す 蓋し翁また与つて力あり 師深くその才学を愛す 翁の学説は穩健中正にして著書は撰集万葉徴・万葉集東語の栞・万葉集名所抄・万葉集問答書・道丸隨筆等世に聞こゆ 天明四年十月四日六十一才を以て没す 宣長その死を悼み靈前に告ぐる詞を述べて万葉研究の功績を賞し言靈有功老翁と称す また門人の名古屋靈岳院に追悼の碑を建つるに際し 特に翁を偲ぶ和歌二首を刻せしむ 誠に郷土史に輝く一異彩といふべし

昭和三十三年十月四日 元国学院大学長 文学博士 河野省三撰文並書



除幕式は地元の有力者及び文化人、多数の村民・学童の参列のもとに神式により厳粛に挙行された。除幕式の綱を引いたのは狩野修三氏（七十九才大工棟梁 滋賀県東浅井郡虎姫町宮部の人）だったと中西氏の「田中道麿伝」（昭和五十二年刊）は記している。

以降毎年祥月命日にあたる十月四

日（最近はずれることもあるが）に碑前において顕彰供養祭が仏式により営まれている。ところが昭和五十七年（1982）頃までは狩野修三氏が翁の縁者として、地元の西脇庄吉氏（現西脇敏広の父）の送迎により出席されていたと、翁と西脇庄吉、狩野修三氏とどんな関係があったのだろうか。昭和三十二年の顕彰碑除幕式にあたって、滋賀県の狩野氏が翁との第一縁者として選ばれたのには、それなりの理由があつてのことであろう。平成の

今になって両氏とも故人になられ誰も知る由もない。平成二十年（2008）十月四日に狩野修三氏の孫にあたる尚士氏が来町され「何故祖父が除幕式に呼ばれたのか？」翁と狩野家との関係など質されたが、西脇敏広氏共に何もつかめぬままだった。

13. 翁と私　いくつかの謎

私が田中道磨翁を知ったのは昭和六十年（1985）である。養老町に移り、単身赴任の勤務を終えて帰ってからである。お世話になる養老町の歴史を知ることにつとめた始めである。町の文化財保護協会にも入り、その機関誌を第一号から揃って手にすることができた。その第四号（昭和四十七年（1972）七月一日発行）に中村準一氏執筆の田中道磨伝が述べられていた。それが最初だった。

私の住む広幡の生んだ偉大な国学者……どんな生き方をして……どんな業績を残した人なのか……知人に尋ねたり、地方の有識者・古老を訪ねて聞き取り調査を始めたが、翁を知る人・語ってくれる人は皆無に等しかった。昭和三十二年（1957）に顕彰会が設立され立派な顕彰碑が建立され、以後年年顕彰法要が営まれているのに何たることか……と驚いたことである。

その中で昭和五十二年（1977）刊行の中西慶爾氏著「田中道磨伝」を手にすることはまことに有り難いことだった。それでも判らぬことばかりの謎に包まれた年月はそれこそ矢のように過ぎていった。

平成十二年（2000）秋、前任の田中育次氏が病のため辞せられるにあたり、俄かに代役を仰せつかり同顕

彰会の副会長に推された。副会長とは毎年の供養祭時に翁の遺徳を紹介する講話を担当する役である。必然的に一段と翁を知るべく努力をせざるを得なかった。

だが、広幡に生まれ育った人でも「最近道磨さんは偉い人だと聞くようになったが以前は聞いたことがない」と。それが翁の出生地である飯の木地区でさえ、当然の様に聞かれる筈だった。平成十四年（2002）九十四才の老人（頭も目も耳もしっかりしている）も「田中という名字は飯の木にはない…何も知らない…」と。又広幡公民館長西脇氏（大正十三年（1924）生まれ元小学校長）でも、「公民館長になってから翁の名を聞くようになったが、以前は全く耳にしたことがない…」と、一体何と云うことだろう…本当に知らないのだろうか…。タブーの様に思われたり…謎はますます深みゆくばかりである。

田中という姓は飯の木に存在しなかったと飯木区長経験者は云う。勿論翁の時代は一般農民に姓をもつことはゆるされていなかったことだし、翁がいつから田中姓を名乗ってこられたかもわからないのだから…。田中の姓を訪ねることは無理に思われた。

そんな中で平成十三年（2001）十一月末、飯木の細川幸三氏（当時飯木長寿会長）より飯木地区墓域内に『田中家の墓石』があることを知らされ早速案内を得ることができた。



田中家累代之墓

側面 釈 寂浄 明治十三年（1880）十二月三十一日嘉七

釈尼智光 明治三十年（1897）八月二日キシ

釈 寂光 明治三十年（キ）八月二十五日嘉助

裏面 大正九年（1920）七月 田中 金弥 建立

登り

現在は同区の西脇敏広氏（西脇庄吉の子）が維持管理していると教えられた。

大正九年（1920）はそんなに昔のことではない。誰か知っている筈だと尋ねまわっても、この西脇氏以外からは「そんな墓があったか」ということ以外聞けなかった。

墓石に刻まれている法名について、お寺を訪ねたが住職の交代もあり新制度で過去帳は見せられないという始末。

平成十四年（2002）五月と九月やっと西脇敏広氏宅を訪ねることができ、その母政子氏から判然とはしないが（政子氏は昭和二十年（1945）西脇家に嫁入り）

①田中金弥氏は名古屋市天白区に住んでいた。

②以前は田中家と西脇家との交際があった。

③昭和二十年（1945）頃金弥氏病死　子どもがなく絶家。政子氏の夫庄吉氏（大正十二年（1923）生まれ昭和五十八年（1983）死）は田中家の整理に赴き茶袱台・箱火鉢を持ち帰ったと。

④金弥氏と庄吉氏の父庄衛氏とは従弟関係らしい。
を聞きとることができた。

そしてこの墓石は平成十六年（2004）三月東海環状道路建設計画により飯の木墓地は移転を余儀なくされ田中家の墓石は無縁仏の域に納められた。

ところが大正十四年（1925）五月発刊の『養老郡志』第十四章第二節文学者の欄に田中道磨の項が設けられているその中に意外な記事が記されている。

『道磨の子を奎右衛門といふ　十八才のとき父に別る。其の子嘉蔵四十九才にて没す。其の子庄蔵。その子嘉七八十九才にて死。其の子金弥　郷里を出て他郷に流浪し、今は名古屋に住せり』と　大正十四年（1925）に地元の人々の手になった記事だけに斯様に記されていることは出鱈目ではあるまい。信憑性が高いのではないだろうか。

先の田中家の墓石銘とくらべると、嘉七―金弥でなく嘉七―嘉助―金弥となるのではないだろうか。顕彰碑除幕式の際一番濃い縁者として出席された狩野氏、田中家の墓石をお守りしてこられた西脇氏。郡志に記されている翁の子孫：はどんな関係にあるのだろうか。先に狩野尚士氏に問われたけれど判然としないまゝ。

田中道磨 ― 左右衛門 ― 嘉蔵 ― 庄蔵 ― 嘉七 ― 嘉助 ― 金弥
天明四年 (1784) 死 四十九才で死 明治十三年 (1880) 死 明治三十年 (1897) 死 昭和二十年 (1945) 頃死

狩野 嘉市 修三 修 尚士
ゆみ 昭和三十二年 (1957) 七十九才碑の除幕式 修三

西脇 庄衛 庄吉 敏広
(金弥のいとこ) 大正十二年 (1923) 生 昭和五十八年 (1983) 死 昭和二十年 (1945) 生

もう一点は顕彰碑文中　翁は遠江国浜松の賀茂真淵について古学を修む：　とあるが直接指導を受けられた機会があったのだろうか？

終わりに、何か道磨さんに心惹かれるものがある。何故だろうか：これだとはっきり言い切ることは出来ないが…。

町内には幾多の諸先輩があり先見の眼を以て克苦勉強し、幾多の苦難を乗り越えてその功を為し、又資産をなげうって公益の事業に身を捧げた尊い生き方を示して下さった方々が多く在せる。

いま町で顕彰会をもってその功を讃え遺徳を偲ぶ方々もある。それらのどの方からも学ぶべきところがあり、教えられるものが存することは言うまでもないことである。その偉大さには感服するのだが、畏敬の念を強くするのだが、何か私には遠く離れた処、手の届かないところの人のように思えてならない。何か親しみがもてないのである。

そりゃあ、あたり前のことだ、凡人と非凡な人と一緒になる筈がないと笑われるにちがいないが：

それが何故か道磨さんには親しみを覚えるのである。温かみを感じるのである。

道磨さん～と何年も思い続けてきたせいだろうか。

三十才近くなって一度捨てた思いを立戻って初志を貫徹した

清貧に甘んじ、粗衣粗食飾ることをしなかった

幕政時代の百姓の子が学問を志し生涯を学び通した

植物・昆虫・動物までを題材に庶民的なうたよみだった…から？

養老町民憲章に「おとしよりが豊かにくらせる町にしましょう」とうたわれているが、豊かにくらすとはどんな生活を夢みてのことだろうか。憲章を目にする度に、唱える度にこのことを思うのである。

それにしても道磨さんこそ豊かにくらしえた、おとしよりではなかったろうかと思われる。私は卅年前養老町に移り住んで以来思いもよらぬ道磨さんとの縁を貰うことができた、全く不思議な事である。奇跡といえるかもしれない、そして当然豊かに暮らしている一人だと感謝している。

きよらなるこの広幡に大人ありし村の誇りぞ町の宝ぞ

縁といふ不思議な力身にうけて大人を知りたるよろこびに生く

個人的なこと、専越極まりないことに踏み込んでしまったことを深く詫ひつ、

終わりに

田中道磨翁研究は今後も深く追求されねばならぬことであるが、私の力では年と共にこれ以上突っ込んだことはできそうもない。只若い力の出現に待つしかない。この拙稿がその足掛りとなればそんなうれしいことはありません。

本書の上梓については

- ・ 中西慶爾稿本耳社 昭和五十二年八月一日発行「稿本田中道磨伝」
 - ・ 養老町文化財保護協会機関誌「養老の文化財」
 - ・ 養老町々民大学（平成十六年十二月・平成十七年十二月）講師松阪本居宣長記念館研究主任 吉田悦之氏からの講義資料
 - ・ 大正十四年五月二十五日発行 養老郡志
 - ・ 養老町図書館蔵「養老名所案内」
 - ・ 田中道磨展（平成七年十二月一日～平成八年二月二十九日）目録
- を根幹にさせて戴いた。

本書の上梓について養老町教育委員会、西濃印刷株式会社の方々の並々ならぬお力添えをいただいたこと、特に記し感謝の意を表したい。

又いろいろご協力下さった地元の方々へも併せて感謝の意を表する次第である。

平成二十三年十月四日

養老町が生んだ国学者

田中道磨さん

発行 平成二十三年十月四日

発行者 田中道磨翁顕彰会

養老町教育委員会

印刷 西濃印刷株式会社

冬目詠真常平賀

田中道賢

寄崗

美なり梅より色
あらずと云ふ乃を
風にかえ花ハハ代
座さ